

中学生の「いじめ」被害と発達障害傾向・学校適応

三島 浩路*

Junior High School Students' Suffering from Bullying,
Developmental Disorders, and School Adaptation

MISHIMA Kouji

要 約

本研究では、中学校を卒業したばかりの子どもをもつ保護者約2,000人を対象に調査を行い、中学生当時の子どもの状況に関する資料を収集した。具体的には、「いじめ」被害、発達障害傾向・中学3年間の欠席日数・携帯電話に対する依存傾向・摂食障害傾向についての資料を収集した。資料を分析した結果、「ASD (autism spectrum disorders) 傾向」を示す生徒ほど、「いじめ」被害を受ける可能性が高いことが示唆された。さらに、「いじめ」被害を受けた生徒は、欠席日数が多く、携帯電話に対する依存傾向や摂食障害傾向が強いことも示唆された。

キーワード：いじめ 発達障害 学校適応

1 目 的

本研究では、「いじめ」被害を、親しい友人からいじめられたことによる被害と、同じ学級に所属する多くの生徒からいじめられたことによる被害とに分け、それぞれの被害体験が、生徒の欠席日数や携帯電話に対する依存傾向、摂食障害傾向とどのような関連があるのかを検討する。さらに、「いじめ」被害が、発達障害に関連する指標と、どのように関連するのかも合わせて検討する。

はじめに、親しい友人からいじめられたことによる被害と、同じクラスに所属する多くの生徒からいじめられたことによる被害とに被害を分ける理由を説明する。

Rivers & Smith (1994) は、直接的物理的攻撃・直接的言語的攻撃・非直接的攻撃の3種類に「いじめ」

を分類している。11～16歳の生徒を対象に「いじめ」に関する調査を行って収集したデータを因子分析した結果、Mynard & Joseph (2000) は「物理的」「言語的」「社会的な関係操作」および「持ち物への攻撃」という4因子を抽出した。さらに、オーストラリアの12～18歳の生徒約4,000人を対象に行った「いじめ」に関する調査では、言語的・社会的・物理的の3つに「いじめ」を分類している (Marsh et al., 2004)。

Rivers & Smith (1994) の非直接的攻撃は、関係性攻撃 (Crick & Grotpeter, 1995) と呼ばれるものであり、相手を排除したり、無視したり、友人関係の終焉をほのめかしたりする方法による「いじめ」に相当する (Simmons, 2002)。「いじめ」を分類する場合、以上のように、叩いたり蹴ったりするような攻撃による物理的な「いじめ」と、言葉による言語的な「いじめ」、さらには、関係性攻撃による社会的な「いじめ」に分類することが多い。

* 中部大学現代教育学部

ところで、こうした攻撃により被害者が受けるダメージの大きさは、被害者と加害者との関係や学級雰囲気により異なることが予想できる。排除されたり、無視されたりする関係性攻撃によるダメージは、被害者と加害者との関係が親密であるほど大きく、日常的にかかわり合うことが少ないクラスメイトから無視されることに比べて、親しい仲間は無視されることの方が大きなダメージを受けるであろう。吉武ら（2010）は、中学生当時の携帯電話の使用に関する調査を高校生を対象に実施し、相手からの反応が遅いことや接続を拒否されることにより生じる心理的なダメージは、極めて親しい仲間がそのような行動をした場合に最も大きく、相手との関係が疎遠になるほど小さいことを明らかにしている。森田ら（1999）は、「仲のよい友だち」からの「いじめ」と、「それ以外の子」からの「いじめ」とに分けて、「いじめ」に関する大規模な調査を行い、2つのいじめには異なった点があることを示した。竹川（1993）は、中学2年生15学級を対象に調査を行い、傍観者の立場を含め、学級集団の半数以上が関わった「いじめ」と、少人数の生徒集団内で起きた「いじめ」の2つに「いじめ」を分類し、学級内のソシオメトリック構造等との関連を検討した。その結果、学級内の多くの生徒が関わった「いじめ」が起きた学級は、そうした「いじめ」が起きなかった学級に比べて、仲間集団の凝集性が高く、仲間集団の関係が相互に排他的となっており、生徒の相互承認的な雰囲気が乏しいことが示唆された。さらに、小学校高学年（三島、2003）、中学生（三島、2009）に関しては、学級内の不特定多数からの「いじめ」被害に性差はみられないが、仲間からの「いじめ」被害は男子に比べて女子の方が多いという結果が得られており、「いじめ」に該当する攻撃行動のちがいや性差、被害者にダメージをもたらす対人関係や学級雰囲気の影響のちがいがあることから、「いじめ」を分類した。

「いじめ」被害体験は、「いじめ」の種類によらず、生徒の登校意欲を減退させ、生徒の欠席日数を増加させることが予想できる。また、Kaltiala-Heino et al. (2000) は、「いじめ」被害・加害の両方を経験した子どもに、食欲減退の傾向がみられたことを報告しており、「いじめ」被害が摂食障害傾向と関連する可能性もある。さらに、三島（2013）が高校生を対

象に行った調査から、携帯電話に対する依存傾向も「いじめ」被害に関連することが示唆されており、本研究でも、「いじめ」被害と摂食障害傾向や携帯電話に対する依存傾向との関連について検討する。

つぎに、「いじめ」と発達障害との関連について考える。「小学校から高校までを通じて ASD (autism spectrum disorders; 自閉症スペクトラム障害) の児童生徒は、他の子どもたちに比べて『いじめ』の標的となるリスクが断然高い」（訳書 p. 25）と Gray（2003）は述べている。Van Roekel, Scholte, & Didden（2010）は、ASD の児童生徒は、社会的能力の不足や友人の少なさから、「いじめ」の被害者や加害者となるリスクが大きいと述べている。Little（2002）は、アスペルガー障害・非言語性学習障害の子どもをもつ保護者を対象に調査を行い、調査対象者の94%がここ1年の間に「いじめ」被害を受けているという結果を得た。Wainscot et al. (2008) がイギリスで行った調査でも、アスペルガー障害・高機能自閉症の子どもの約85%が、週に1回以上の「いじめ」被害を受けていることを報告している。さらに、ASD の子どもをもつカナダの母親を対象に Cappadocia, Weiss, & Peple (2012) が行った調査においても、70%以上の子どものが、ここ1ヶ月の間に「いじめ」被害を受けたことを報告している。Sofronoff, Dark, & Stone (2011) は、アスペルガー障害の子どもをもつ保護者を対象に調査を行い、定型発達児に比べてアスペルガー障害をもつ子どもは、社会的に脆弱である (social vulnerability) ことや、そうした社会的脆弱さが、「いじめ」と関連することを示唆する結果を得た。Egan & Perry (1998) は、身体的な弱さや不安の強さ、社会的スキルの乏しさなどといった子どもの行動面にかかわる脆弱性が、「いじめ」被害の受けやすさに関連することを示しており、こうしたことから、ASD の児童生徒は、「いじめ」被害を受けやすいと考えられる。

ところで、アメリカの小学6年生・中学1・2年生を対象に行った調査で、「いじめ」加害者は自己制御 (self-control) が乏しいことが示された (Haynie et al., 2001)。ADHD (注意欠陥多動性障害) の特徴として自己制御の困難さがある (e.g., 岡崎ら, 2001) ことから、こうした障害をもつ児童生徒の中にも「いじめ」加害にかかわる児童生徒が多いことが予想さ

れる。

Unnever & Cornell (2003) は、ADHD と自己制御、「いじめ」被害・加害の関連を、パス解析の手法を用いて分析し、ADHD は「いじめ」被害に直接関連し、「いじめ」加害に関しては ADHD が自己制御を媒介として間接的に関連することを示唆する結果を得た。フィンランドの Kumpulainen, Räsänen, & Puura (2001) が行った調査によれば、注意欠陥障害 (attention deficit disorder) が「いじめ」加害・被害の両方に関連していた。9~14 歳の子どもを対象に Wiener & Mak (2009) は、「いじめ」と ADHD の関連について調査し、ADHD 児童生徒自身の報告によれば、言葉による攻撃や物理的な攻撃、さらには関係性攻撃によってなされた「いじめ」被害をより高い頻度で受けていた。こうしたことから、注意欠陥多動性障害の生徒も、「いじめ」被害を受ける可能性が高いと考えられる。

本研究では、中学校を卒業したばかりの子どもをもつ保護者を対象にした調査結果をもとにして、「いじめ」被害に関連する要因の検討を行う。

2 方 法

(1) 調査対象者と調査時期

2008 年 4 月から 2013 年 4 月にかけて A 県立の B 高等学校および C 高等学校に入学した生徒の保護者 2,189 人を対象に調査を実施した。分析に用いたのは、本研究に関連するすべての設問に回答した保護者 2,031 人のデータである。分析対象となった保護者の子どもの性別は、男子 957 人・女子 1,074 人であった。

(2) 調査の方法

それぞれの高校の入学説明会の折、「高校生活をより充実させるための調査」という名目で調査を行った。なお、本調査の結果は、それぞれの高校における生徒指導や学習指導に活用し、生徒の学校生活に対する適応感を向上させることを目的に利用している。具体的には、中学生当時に深刻な「いじめ」被害を受けたという生徒に対しては、入学当初よりスクールカウンセラー等により面接を行うなどの方法で活用している。

(3) 本研究に関連する設問

ア いじめ被害

親しい仲間からの「いじめ」被害と、学級全体からの「いじめ」被害とに分けて調査した。親しい仲間からの「いじめ」被害に関しては、「子どもが親しくしていた子からいじめられた」という内容であり、学級全体からの「いじめ」被害に関しては、「同じクラスの多くの子からいじめられた」という内容である。それぞれの内容について、「なかった」「ときどきあった」「よくあった」の 3 件法で回答を求めた。なお、分析を行う際には、「よくあった」と「ときどきあった」を合わせて「被害有り」群とし、「なかった」と回答した場合には「被害無し」群とした。

イ 欠席日数

中学 3 年間の合計欠席日数を、次の 4 つの中から一つを選択する方法で回答を求めた。「5 日以下」「6~15 日」「16~30 日」「31 日以上」。

ウ 「いじめ」被害に関連する要因

「いじめ」被害に関連する以下の項目に、「あてはまる」「あてはまらない」のいずれかを選択する方法で回答を求めた。

(ア) 携帯電話に対する依存傾向：携帯電話が身近になると不安になるようだ。

(イ) 摂食障害傾向：行き過ぎたダイエットをしたことや、異常な過食を何度もしたことがある。

(ウ) 発達障害傾向に関連する指標

ASD 傾向に関しては、「特定の事柄に対するこだわりがとても強い」という項目を、ADHD 傾向に関しては、「『忘れ物』がとても多い」という項目を用いた。ASD 傾向項目に「あてはまる」と回答した群を「ASD 傾向」群、ADHD 傾向項目に「あてはまる」と回答した群を「ADHD 傾向」群とした。

3 結 果

(1) 「いじめ」被害の性差

親しい仲間からの「いじめ」被害と、学級全体からの「いじめ」被害に性差がみられるのかどうかを分析した (Table 1)。その結果、親しい仲間からの「いじめ」被害には、性差がみられたが ($\chi^2=7.29$, $df=1$, $p<.01$)、学級全体からの「いじめ」被害には、性差がみられなかった ($\chi^2=0.03$, $df=1$, $n.s.$)。

Table 1 2種類の「いじめ」被害の性差

性別	親しい仲間からの被害		合計	学級全体からの被害	
	有り	無し		有り	無し
男子	77(8%)	880(92%)	957	51(5%)	906(95%)
女子	125(12%)	949(88%)	1,074	59(6%)	1,015(94%)

Table 1の結果から、男子に比べて女子の方が、親しい仲間からの「いじめ」被害経験が多いことが示唆された。

(2) 「いじめ」被害と欠席日数

親しい仲間からの「いじめ」被害・学級全体からの「いじめ」被害の有無により、中学校在学期間中の欠席日数がどのように異なるのかを分析した (Table 2・Figure 1・2)。その結果、親しい仲間からの「いじめ」被害と欠席日数の間に有意な関連がみられた ($\chi^2 = 22.7$, $df = 3$, $p < .001$)。残差分析を行った結果、欠席日数が「5日以下」の群では「被害無し」が有意に多い ($p < .001$) のに対して、「16～30日」・「31日以上」群では、「被害有り」が有意に多い ($p < .01$) という結果が得られた。

学級全体からの「いじめ」被害と欠席日数の間にも有意な関連がみられた ($\chi^2 = 50.3$, $df = 3$, $p < .001$)。残差分析を行った結果、欠席日数が「5日以下」の群では「被害無し」が有意に多い ($p < .001$) のに対して、「16～30日」・「31日以上」群では、「被害有り」が有意に多い ($p < .001$) という結果が得られた。

以上のことから、「いじめ」の種類にかかわらず、「いじめ」被害が欠席日数と関連しており、「いじめ」被害を受けた者ほど、欠席日数が多いことが示唆された。

(3) 「いじめ」被害と携帯電話に対する依存傾向

親しい仲間からの「いじめ」被害・学級全体からの「いじめ」被害の有無と、携帯電話に対する依存傾向がどのように関連するのかを分析した (Table 3)。その結果、親しい仲間からの「いじめ」被害と携帯電話に対する依存傾向の間には有意な関連がみられた ($\chi^2 = 14.8$, $df = 1$, $p < .001$)。学級全体からの「いじめ」被害と携帯電話に対する依存傾向の間にも有意な関連がみられた ($\chi^2 = 8.83$, $df = 1$,

$p < .01$)。Table 3の結果から、「いじめ」の種類にかかわらず、「いじめ」被害が携帯電話に対する依存傾向に関連しており、「いじめ」被害を受けた者ほど、携帯電話に対する依存傾向が強いことが示唆された。

(4) 「いじめ」被害と摂食障害傾向

親しい仲間からの「いじめ」被害・学級全体からの「いじめ」被害の有無と、摂食障害傾向がどのように関連するのかを分析した (Table 4)。その結果、親しい仲間からの「いじめ」被害と摂食障害傾向の間には有意な関連がみられた ($\chi^2 = 33.6$, $df = 1$, $p < .001$)。学級全体からの「いじめ」被害と摂食障害傾向の間にも有意な関連がみられた ($\chi^2 = 32.3$, $df = 1$, $p < .001$)。Table 4の結果から、「いじめ」の種類にかかわらず、「いじめ」被害が摂食障害に関連しており、「いじめ」被害を受けた者ほど、摂食障害傾向が強いことが示唆された。

(5) 「いじめ」被害と発達障害

親しい仲間からの「いじめ」被害・学級全体からの「いじめ」被害の有無と、「ASD傾向」・「ADHD傾向」がどのように関連するのかを分析した (Table 5)。

「ASD傾向」に関しては、親しい仲間からの「いじめ」被害との間に有意な関連がみられ ($\chi^2 = 58.5$, $df = 1$, $p < .001$)、学級全体からの「いじめ」被害との間にも有意な関連がみられた ($\chi^2 = 55.6$, $df = 1$, $p < .001$)。Table 5の結果から、「いじめ」の種類にかかわらず、「いじめ」被害が「ASD傾向」と関連しており、「ASD傾向」を示す者ほど、「いじめ」被害を受ける可能性が高いことが示唆された。

「ADHD傾向」に関しては、親しい仲間からの「いじめ」被害との間に有意な関連がみられ ($\chi^2 = 5.91$, $df = 1$, $p < .05$)、学級全体からの「いじめ」被害との間にも有意な関連がみられた ($\chi^2 = 15.0$, $df = 1$,

Table 2 2種類の「いじめ」被害と中学3年間の欠席日数

欠席日数	親しい仲間からの被害		合計	学級全体からの被害	
	有り	無し		有り	無し
5日以下	113(56%)	1,244(68%)	1,357	54(49%)	1,303(68%)
6～15日	57(28%)	455(25%)	512	28(25%)	484(25%)
16～30日	16(8%)	72(4%)	88	16(15%)	72(4%)
31日以上	16(8%)	58(3%)	74	12(11%)	62(3%)

※（％）は、縦の合計を100％として計算した値

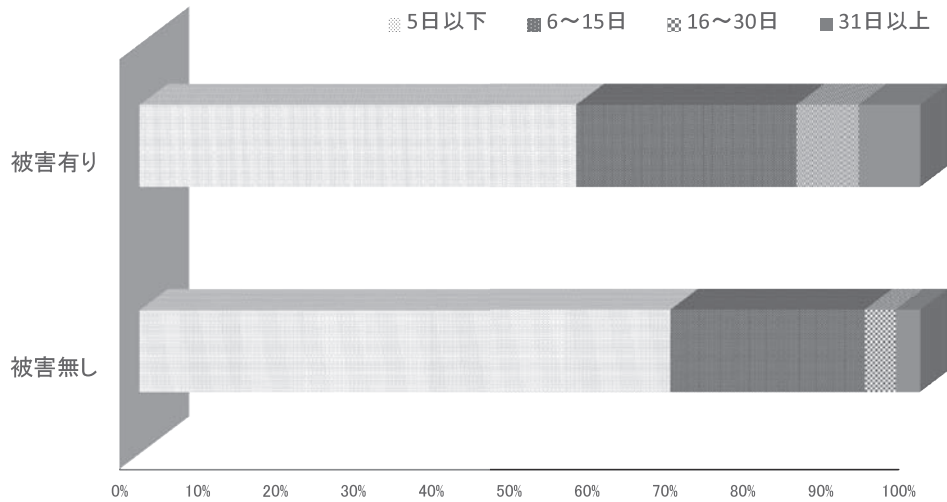


Figure 1 親しい仲間からの「いじめ」被害と中学3年間の欠席日数

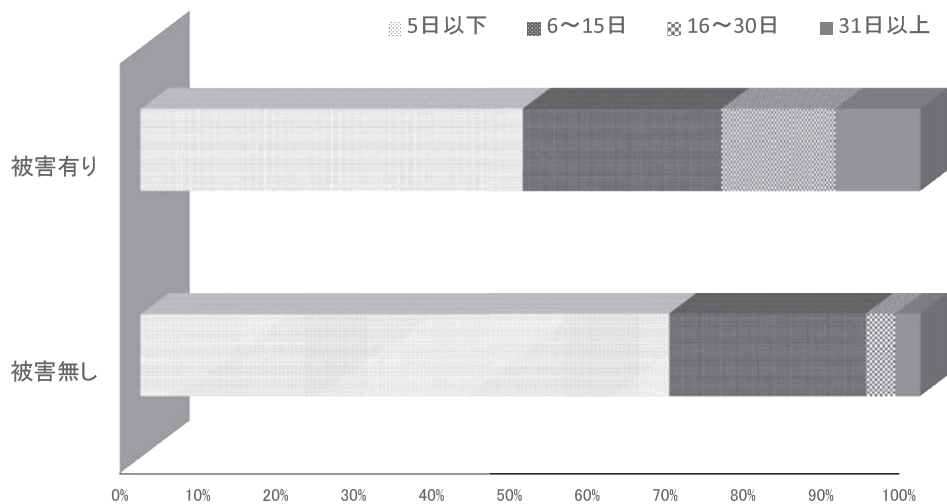


Figure 2 学級全体からの「いじめ」被害と中学3年間の欠席日数

Table 3 2種類の「いじめ」被害と携帯電話に対する依存傾向

携帯電話 依存傾向	親しい仲間からの被害		合計	学級全体からの被害	
	有り	無し		有り	無し
あり	41(20%)	202(11%)	243	23(21%)	220(11%)
なし	161(80%)	1,627(89%)	1,788	87(79%)	1,701(89%)

※（％）は、縦の合計を100％として計算した値

Table 4 2種類の「いじめ」被害と摂食障害傾向

摂食障害 傾向	親しい仲間からの被害		合計	学級全体からの被害	
	有り	無し		有り	無し
あり	10(5%)	11(1%)	21	7(6%)	14(1%)
なし	192(95%)	1,818(99%)	2,010	103(94%)	1,907(99%)

※(%)は、縦の合計を100%として計算した値

Table 5 2種類の「いじめ」被害と発達障害傾向

ASD 傾向	親しい仲間からの被害		合計	学級全体からの被害	
	有り	無し		有り	無し
あり	86(43%)	352(19%)	438	55(50%)	383(20%)
なし	116(57%)	1,477(81%)	1,593	55(50%)	1,538(80%)

ADHD 傾向	親しい仲間からの被害		合計	学級全体からの被害	
	有り	無し		有り	無し
あり	49(24%)	317(17%)	366	35(32%)	331(17%)
なし	153(76%)	1,512(83%)	1,665	75(68%)	1,590(83%)

※(%)は、縦の合計を100%として計算した値

$p < .001$)。Table 5の結果から、「いじめ」の種類にかかわらず、「いじめ」被害が「ADHD 傾向」と関連しており、「ADHD 傾向」を示す者ほど、「いじめ」被害を受ける可能性が高いことが示唆された。

本研究では、生徒の保護者に対して質問紙に回答を依頼するという形式で資料を収集した。保護者に回答を求めるという調査方法の関係で、「ASD 傾向」や「ADHD 傾向」について、家庭で把握しやすい項目を1項目ずつ用いることになった。しかし、本研究で用いた項目は、相互に関連している可能性がある。そこで、発達障害に関連する指標について、「ASD 傾向」のみを示す群（「ASD 単独」群）と、「ADHD 傾向」のみを示す群（「ADHD 単独」群）、「ASD 傾向」と「ADHD 傾向」の両傾向を示す群（「両傾向」群）とに分けて、2種類の「いじめ」被害との関連を分析した（Table 6・Figure 3・4）。

その結果、親しい仲間からの「いじめ」被害の有無と、発達障害に関連する指標（4群化）の間には有意な関連がみられた（ $\chi^2 = 59.8$, $df = 3$, $p < .001$ ）。残差分析を行った結果、「ASD 単独」群と「両傾向」群は「被害有り」が有意に多い（ $p < .001$ ）のに対して、「ADHD 単独」群は、「いじめ」被害に有意な関連がみられなかった。

学級全体からの「いじめ」被害の有無と、発達障害に関連する指標（4群化）の間にも有意な関連がみられた（ $\chi^2 = 64.5$, $df = 3$, $p < .001$ ）。残差分析

を行った結果、「ASD 単独」群と「両傾向」群では「被害有り」が有意に多い（ $p < .001$ ）のに対して、「ADHD 単独」群は、「いじめ」被害に有意な関連がみられなかった。

以上のことから、本研究で用いた指標に関しては、「ASD 傾向」と「いじめ」被害との間に関連があることは示唆されたが、「ADHD 傾向」と「いじめ」被害との間に関連があることは示唆されなかった。

4 考 察

(1) 「いじめ」被害と学校適応

本研究では、親しい仲間からの「いじめ」被害に性差がみられたが、学級全体からの「いじめ」被害には性差がみられず、男子に比べて女子の方が、親しい仲間からの「いじめ」被害経験が多いことが示唆された。この結果は先行研究の結果（e. g.、三島、2003・2009）と一致する方向のものであり、本研究で収集した保護者の資料の妥当性を示すものといえよう。

本研究においては、「いじめ」被害を2つに分類したが、どちらの「いじめ」被害を受けたかにかかわらず、被害を受けた生徒は被害を受けなかった生徒に比べて、欠席日数がより多く、携帯電話に対してより強い依存傾向を示し、摂食障害の可能性がより高いことも示唆された。こうした結果は、「いじめ」

Table 6 2種類の「いじめ」被害と発達障害傾向（ASDとADHD単独と両傾向保有）

発達障害傾向	親しい仲間からの被害		合計	学級全体からの被害	
	有り	無し		有り	無し
両方無し	96(48%)	1,267(69%)	1,363	43(39%)	1,320(69%)
ASD単独	57(28%)	245(13%)	302	32(29%)	270(14%)
ADHD単独	20(10%)	210(12%)	230	12(11%)	218(11%)
両傾向	29(14%)	107(6%)	136	23(21%)	113(6%)

※（％）は、縦の合計を100%として計算した値

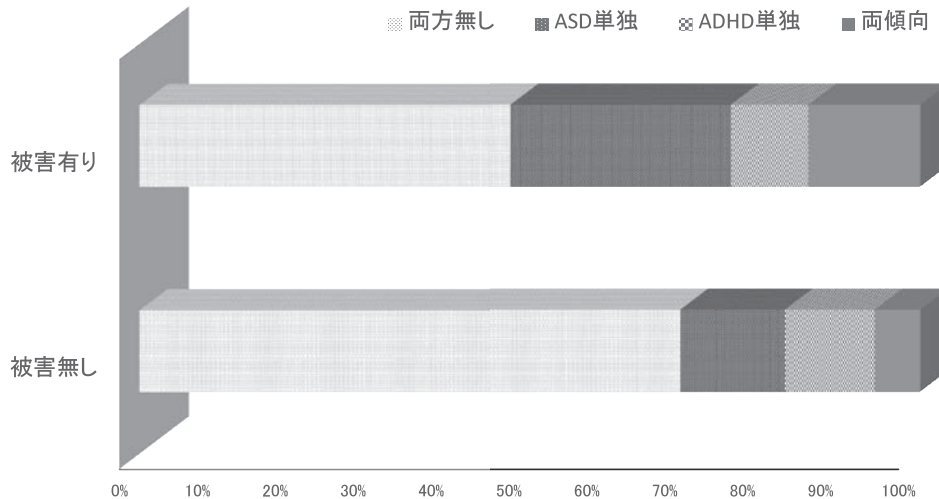


Figure 3 親しい仲間からの「いじめ」被害と発達障害傾向

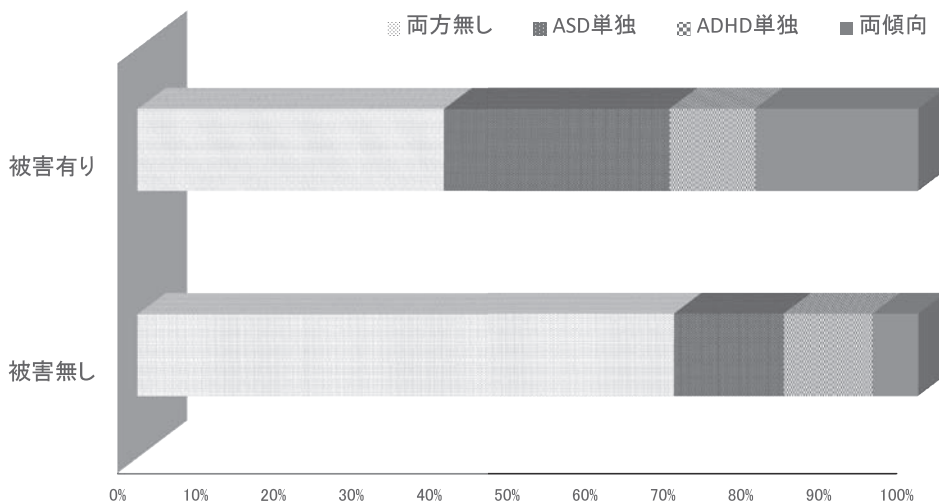


Figure 4 学級全体からの「いじめ」被害と発達障害傾向

被害が、学校生活に対する適応感を低下させることを示唆するものであると同時に、携帯電話に対する依存傾向の強さや摂食障害が、「いじめ」被害の誘因となった可能性も否定できない。携帯電話に対する依存傾向や摂食障害と「いじめ」被害との因果関係について、今後はさらに多角的なデータ収集を行い

検討していく必要がある。

(2) 「いじめ」被害と発達障害

本研究では、「ASD 傾向」と「いじめ」被害との間に関連があることが示唆され、「ADHD 傾向」と「いじめ」被害との関連は示唆されなかった。「PDD

(Pervasive Developmental Disorders；広汎性発達障害)の子どもたちは他の健常児と見分けがつきにくく、また子ども同士でも障害という認識がもたれにくいことや、常に大人が付き添っているわけでもないために、いじめの標的になる可能性が高い」(p. 56)と米山(2008)は述べているが、こうした理由は、Van Roekel et al. (2010)が述べている社会的能力の不足や友人の少なさとは異なる視点からのものである。さらに、杉山(1999)は「いじめなどの迫害的な体験を重ねてきた者は、その記憶を核に迫害的な文脈で他者の心理を読む傾向が生じてしまう」(p. 257)と、PDDの子どもが小学生の頃に受けた「いじめ」被害が、その後の対人関係に影響することを示唆している。こうした点なども視野に入れ、発達の要因も含めて、ASD傾向を示す生徒が、いじめ被害を受けやすい理由について検討する必要がある。

本研究においては、「ADHD傾向」と「いじめ」被害との間に関連がみられなかったが、これは、「ADHD傾向」を測定した項目による影響が考えられる。国立特殊教育総合研究所(2004)は、「通常の学級におけるADHD児の実態把握と支援」の中で、「授業中、席を離れること」「忘れ物が多いこと」「ノートの書き写しが不得意なこと」「なかなか集中できないこと」など9つの状態をADHD児の特徴として挙げている。これらの中で、保護者による観察・評価が最も容易なものと考えられる『忘れ物』がとて多い」という項目を、本研究では採用した。DSM-IV-TR(2000)によれば、ADHDは「不注意」「多動性」「衝動性」を特徴としているが、今回の調査では、「不注意」に該当するであろう「忘れ物」に関する点だけを尋ねている。実際に、教室内の行動等で問題となるのは、「多動性」「衝動性」である可能性が高く、こうした特徴を質問項目に用いた場合は、異なる結果が得られた可能性もある。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)「循環型いじめ」生成・持続メカニズムの解明と予防・解消方法の開発 課題番号25380898)の助成を受けた。

文 献

- American Psychiatric Association (2000). Quick reference to the diagnostic criteria from DSM-IV-TR. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳 精神疾患の分類と診断の手引き(2002) 医学書院)
- Cappadocia, M. C., Weiss, J. A., & Pepler, D. (2012). Bullying experiences among children and youth with autism spectrum disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 42, 266-277.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- Egan, S. K., & Perry, D. G. (1998). Does low self-regard invite victimization? *Developmental Psychology*, 34, 299-309.
- Gray, C. (2003). Gray's guide to bullying parts I-III. *Jeison Autism Journal* 16(1): 2-19. (腹巻智子訳(2008). 発達障害といじめ かもがわ出版)
- Haynie, D. L., Nansel, T., Eitel, P., Crump, A. D., Saylor, K., Kai Yu., & Simons-Morton, B. (2001). Bullies, victims, and bully/victims: Distinct groups of at-risk youth. *Journal of Early Adolescence*, 21, 29-49.
- Kaltiala-Heino, R., Rimpelä, M., Rantanen, P., & Rimpelä, A. (2000). Bullying at school: An indicator of adolescents at risk for mental disorders. *Journal of Adolescence*, 23, 661-674.
- 国立特殊教育総合研究所(2004). 注意欠陥/多動性障害(ADHD)児の評価方法に関する研究 独立法人国立特殊教育総合研究所情緒障害教育研究部
- Kumpulainen, K., Räsänen, E., & Puura, K. (2001). Psychiatric disorders and the use of mental health services among children involved in bullying. *Aggressive Behavior*, 27, 102-110.
- Little, L. (2002). Middle-class mothers' perceptions of peer and sibling victimization among children with Asperger's syndrome and nonverbal learning disorders. *Issues in Comprehensive Pediatric Nursing*, 25, 43-57.
- Marsh, H. W., Parada, R. H., Craven, R. G., & Finger, L. (2004). In the looking glass: A reciprocal effects model elucidating the complex nature of bullying, psychological determinants, and the central role of self-concept. In C. E. Sanders & G. D. Phye (Eds.), *Bullying: Implications for the classroom*. San Diego: Elsevier Academic press. pp. 63-106.

- 三島浩路 (2003). 親しい友人間にみられる小学生の「いじめ」に関する研究 社会心理学研究、19、41-50.
- 三島浩路 (2009). 中学生の「いじめ」被害の性差に関する報告 日本応用心理学会第 76 回大会発表論文集、p. 72.
- 三島浩路 (2013). 学校環境と高校生の携帯電話依存 信学技報 (社団法人 電子情報通信学会)、HCS、112 (412)、101-105.
- 森田洋司・滝 充・秦 政春・星野周弘・岩井彌一 (1999). 日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集— 金子書房
- Mynard, H., & Joseph, S. (2000). Development of the multidimensional peer-victimization scale. *Aggressive Behavior*, 26, 169-178.
- 岡崎慎治・川久保友紀・細川美由紀・前川久男 (2001). 注意欠陥 / 多動性障害児における反応の実行ならびに抑制の自己制御の検討: 連続遂行課題の遂行成績から特殊教育学研究、38(4)、1-10.
- Rivers, I., & Smith, P. K. (1994). Types of bullying behaviour and their correlates. *Aggressive Behavior*, 20, 359-368.
- Simmons, R. (2002). *Odd girl out: The hidden culture of aggression in girls*. New York: Harcourt Inc. (鈴木淑美訳 2003 女の子どうして、ややこしい! 草思社)
- Sofronoff, K., Dark, E., & Stone, V. (2011). Social vulnerability and bullying in children with Asperger syndrome. *Autism*, 15, 355-372
- 杉山登志郎 (1999). 学校への治療教育的対応と連携 杉山登志郎・辻井正次 (編著) 高機能広汎性発達障害—アスペルガー症候群と高機能自閉症— (pp. 254-261.) ブレーン出版
- 竹川郁雄 (1993). いじめと不登校の社会学—集団状況と同一化意識— 法律文化社
- Unnever, J. D., & Cornell, D. G. (2003). Bullying, self-control, and adhd. *Journal of Interpersonal Violence*, 18, 129-147.
- Van Roekel, E., Scholte, R. H. J., & Didden, R. (2010). Bullying among adolescents with autism spectrum disorders: Prevalence and perception. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 40, 63-73.
- Wainscot, J. J., Naylor, P., Sutcliffe, P., Tantam, D., & Williams, J. V. (2008). Relationships with peers and use of the school environment of mainstream secondary school pupils with Asperger syndrome (high-functioning autism): A case-control study. *International Journal of Psychology and Psychological Therapy*, 8, 25-38.
- Wiener, J., & Mak, M. (2009). Peer victimization in children with attention-deficit/hyperactivity disorder. *Psychology in the Schools*, 46(2), 116-131.
- 米山直樹 (2008). 発達障害 本間友巳 (編著) いじめ臨床—歪んだ関係にどう立ち向かうか— (pp. 51-65.) ナカニシヤ出版
- 吉武久美・三島浩路・黒川雅幸・大西彩子・本庄勝・長谷川輝之・長谷川亨・吉田俊和 (2010). 携帯電話の利用が引き起こす問題に関する研究(3)—加害者と被害者の関係性と攻撃形態の違いによる中学生データの検討— 日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集 pp. 454-455.

受付日 2013 年 9 月 30 日

受理日 2013 年 10 月 28 日

Abstract

In this study, we conducted a survey with approximately 2,000 participants, the parents of children who had just graduated from junior high school. We collected data about junior high school students' suffering from bullying, their tendency toward developmental disorders, the number of days of absence over the three years of junior high school, their dependence on cell phones, and their tendency toward eating disorders. The results suggested that students who showed a tendency toward autism spectrum disorder (ASD) had a high probability of suffering from bullying. The results also suggested that students who suffered from bullying were absent from school for many days and had a high tendency toward dependence on cell phones and eating disorders.

[Keywords] bullying, developmental disability, school adaptation